

正宗白鳥全集

第九卷

正宗白鳥全集 第九卷

新潮社版

正宗白鳥全集 第九卷

昭和四十年五月十日 發行
昭和五十一年八月三十日 セット版

全十三卷セット 定價五二〇〇〇圓

著 者 正 宗 白 鳥

發行者 佐 藤 亮 一

印刷所 二光印刷株式會社

製本所 新宿加藤製本

發行所 株式會社 新 潮 社

162 東京都新宿區矢來町七一
電話 業務部(〇三)六五二一一
編輯部(〇三)六五四一一
振替 東京四一八〇八番



亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

正宗白鳥全集

第九卷

編集

監修

中	山	中	小	河
島	本	村	林	上
河	健	光	秀	徹
太	吉	夫	雄	太
郎				郎

第九卷
目次

哀れなる藝術界	二
漫言	三
寧ろモーメントに生くるに若かんや	二三
國人にふさはしからぬ煩悶	二四
今日の音楽と繪畫	二五
放言	二六
片々録	二七
美術界小言	二八
西洋崇拜は凡て是なるか	二九
宗教小觀	三〇
藝苑雜錄	三〇
繪畫小論	三一
洋行の價值	三三
毀譽褒貶	三三
大器晚成	三四
論語とバイブル	三五
通人	三六
菊人形	三九
死	三〇

田舍	三
批評	三
優劣高下の標準	三
未亡人再婚論	三
孟子を読む	三
古を師とせず	三
青年と宗教	四〇
青年の勝利	四〇
懶惰主義	四〇
守田勘彌の傳を讀みて	四〇
美術界雜觀	四〇
美術界雜感	四八
唯昔からの約束	五〇
内村全集を讀む	五一
死に對する恐怖と不安	五
人とその著作	五
安樂に死ぬこと	六〇
英雄論	六
西園寺公の心境	六

福澤翁自傳讀後感	八五
讀書について	八九
「蘇峰自傳」	九三
自主的文化	九三
人物評論	九五
アパート住ひ	九六
和蘭人「伏拜時代」	九七
予の偉人崇拜經路	九八
景教の研究	一〇三
性の満足	一〇六
獨身論	一〇九
老人心理	一一四
嫉妬について	一二九
精神の貧困	一二四
老人の戀	一二六
内村鑑三	一三一
姑息な人生	一四四
新聞と文化	一五五
都會の孤獨	一六六

老翁の女性愛慕	二六六
握手とお辭儀	二七三
親子心中	二八〇
神祕の辯	二八〇
ハダカの繪	二八二
映畫と文樂	二八三
翻譯時代	二八四
『自殺』變り種	二八六
曲學阿世	二八七
我が人生觀	二八九
文藝作品賞と税金	二四三
私の信條	二四五
歌舞伎座復興	二五〇
讀書雜誌	二五一
文か武か	二五二
集團的「死の舞踏」	二五三
我も亦國を憂ふ	二五四
注射ばやり	二五六
洋行ばやり	二五七

憐れなる山羊……………	三六	郷里に歸りて……………	三七
音　　樂……………	三九	都會の聲……………	三七九
人生如何に生くべきか……………	三四〇	試験地獄……………	三八三
苦言甘語……………	三四四	知識の過剰……………	三八八
團十郎襲名……………	三四五	英雄崇拜……………	三九三
默阿彌六十年祭……………	三四六	空論の自由……………	三九七
始めての放送……………	三四七	二つの全集……………	四〇二
講和偶感……………	三四八	大衆雜誌など……………	四〇八
君が代……………	三五〇	江戸趣味と現代……………	四一四
勝負ごと……………	三五二	菊池賞その他……………	四二二
暗中のものがき……………	三五三	色の世界……………	四二八
宗教と文學……………	三五六	洋行流行……………	四三五
どぶ泥世界……………	三五九	入試の理窟……………	四四二
いとほしい夏……………	三六〇	政治家是非……………	四四三
隣組と隣人愛……………	三六〇	恐妻病……………	四四五
評論とは……………	三六三	幼少者の心理……………	四五〇
戦争愚痴……………	三六五	日本と西洋……………	四五二
徳富蘇峰……………	三六六	假裝獨談會……………	四五三
再軍備について……………	三七二	通俗非通俗……………	四六一

眞偽の鑑定……………	四三	不良出版物の排斥……………	四九三
權威に對する疑ひ……………	四六四	魅力ある説教者……………	四九五
新しくもならぬ人生……………	四六六	スターリン様……………	四九五
今日は無事……………	四六八	私も世界の眞相を知りたい……………	四九六
欲望は死より強し……………	四六九	天皇制下・三代に生く……………	五〇五
科學と宗教……………	四七四	受賞辭退……………	五〇五
戰爭を廢止せよ……………	四七六	沈黙と饞舌……………	五〇七
女とは何ぞや……………	四七八	「神これをよしと見給ふ」か……………	五〇九
政變もまた愉しからずや……………	四八四	生きるといふこと……………	五一〇
私の一票……………	四八九	木に據つて魚を求める……………	五一八

解 題……………

中島河太郎 三二

評論

(四)

哀れなる藝術界

オ、シスなくしていかで黃砂千里の砂漠の旅せられんや。

五十の人生は千里の砂漠なり。かの清水湧く綠樹の蔭に一日の疲勞を慰めざるべからず、人生本來何物なるか、如何にして經過すべきか、哲學的解釋はさまざまあるべけれど、要するに苦痛を減じ快樂を増進し面白く世を送らんとするが萬人の望なるは明なり。複雜難解の研究に一生を埋没し自然の性を壓して難行苦行するものあれど、それは少數の物好きの人々の勝手の行業にて一般人類の關する所にあらず。

世は次第に生存競争の激烈となり、パンを得るに忙はしく、裕々たる閑日月を樂む能はざらんとす。されど一方に乾燥無味の業務の劇烈なれば、益々娛樂を求むるの情切なるは自然の勢。西洋諸國の如き日常の風俗の業務繁忙なれど、社

會的國民的娛樂ますます盛にして、かの名手の樂かの名優の技、何々俱樂部某夜會、其れを聞き其れを見其れに列する爲に存在の價値あらしむ。畢竟音樂美術詩歌小説演劇など皆五六十間の苦界を欺いて通過せしむる慰藉者なるなり。人生を教ふるとか導くとかいふは第二の目的にて本來の特色は生命に附着せる苦悶を胡麻化し、倦怠を慰むるにあるは明かなり。藝術の尊むべきは此炎天に枯死せんとする草木に潑ぐ一桶の清水たるに存す。而して我國今日の娛樂界は如何、個人的及び少數者の娛樂は暫らく置く。國民一様に參與すべき娛樂の微々として振はざる何ぞ甚しき。

美術の粹を集めしといはれ、最も人々の嗜好多き演劇は徳川三百年の文化を結晶して殆んど圓滿の域に達せしものを、名優の凋落と共に殆んど滅亡し、これに代はるの新劇未だ起らず、かの所謂新劇といふもの今日にては尙美術として見るべきにあらで、これを喜ぶは下宿屋の女中に夢中になる位の趣味を有せる學生と、おれはこれで芝居を三度見たといふ見物のみ。

音樂とてもこれに同じ、徳川三百年の培養を経て特得の美を發揮せし俗曲も、樂耳なき田舎物を以て滿ちたる満都の市民を喜ばすに足らず、洋樂は只歐風を拙劣に模倣したるものにて、新劇の美術品ならぬ如く未だ美を顯すに至らず。

國民的最大快樂たる音樂と演劇も十年以前頃までは尙徳川

美術界の遺臣數多ありて人生の乾燥となり散文的となるを防ぎ、稍夢幻的たらしめしも、今日はいたましき迄缺如せり。天才の士出づるとも尙吾人一生の間には眞に面白き樂を聴き眞に面白き劇を観る能はざらんか。

翻つて美術界を観るに、これ又同一の嘆を繰返さざるべからず、和洋の美を集めて新式の繪畫を作らんとする者無きにあらねど未だ其の業の緒に就きしものなし。

獨り望みを屬すべきは文學界のみなり。脚本詩歌評論は未だ甚だ幼稚なれど、少くも小説に於ては既に今日驚くべき進歩ある上に前途益々望あるが如し。かの壯士劇が繁盛するも一つは一般に普及せる小説を演ずるにより、原作のお蔭でかの拙劣の技藝をくらますにあらぬか。蓋し明治の文藝界は尙暫らくは小説の天地ならんか

漫 言

天才を要すること切なる今日の如きはなし。天才の出現に適はしき時今日の如きはなし。而して又天才の土の出でざる今日の如きはなし。藝術界群小喧囂凡人俗士一面に漲り、敢て他の爲さざる所をなし、常規を破るの才を有するものな

し。凡庸の人間學堂を出で、數年幼稚の筆を弄すれば其の名は直ちに文壇に喋々され、色彩を塗抹するの術さへ解すれば直ちに美術家として持囃さる、眞天才の現はれなば一代を風靡すること誠に易々たるのみならん。

されど古來天才の乏しきは美人の乏しきが如く、造化の妙工も盛に水平線の人物をのみ生じて蠢々としてうごめかしめ、ヘレンは常に末代の垂涎渴仰する所となり、ラファエル、ミケランゼロは永へに地球上の珍とせらる。

既に天才なし。せめては職に忠實なる人にも欲し、敢て克己して不性々に物質的榮華の望なき文筆彩管に貴重なる一生を托するの要はあるまじけれど、宿世の果報つたなく、既に此の境界に身を投じたる上は我が爲にも世の爲にも一身を其處に沒して他を顧みざることこそ望ましけれ、藝術界は別天地なり。道德倫理すら或は容喙するの權利なく、社會的風習を固守するの要なき程なるに、金錢名利にこの純界を汚させて可ならんや。ヴィナスとマンモンとは兼ね仕ふる能はざるなり。

徳川時代などには眞に藝術に全心を沒して肉體の寒飢を顧みざるものありき。一管の笛其の生命たり、一双の絃器を其の天地とせしものもありき、かの役者なるものすら酒色以外藝道に身を沒し須臾も心を茲に放たざりしものもありき。弊褊を被つて社會の常習に背ける行爲ハイカラ式の今日には

文明的藝術家ならずとて斥けらるゝ、か知れねど、藝術家の原籍はバルナッサス山にありてミューズの法律の下にあれば、敢て下土の繁文縟禮じよくれいを受ざるも可ならずや。

然るに十九世紀の俗風潮に觸れ、西洋拜金國の病弊に感染されてより、藝術界すら銅臭俗氣鼻を突くに至りぬ。試に現時の美術家等を見よ。眞に己れの業を樂んで、専心一意なるもの幾人かある。座臥黄金の多寡を數へて、眞に美を愛するもの二三子を除きては全く缺如たり。大作を抱いて道路に斃たふるの概あるものなきは擬て置き、售るゝを期せざる一幅の小畫をも造るの勇氣なし。彼れは一樽の酒と一賣女の爲には幾多の濫作をなして美神を汚すを辭せざるべし。我國藝術界はかゝる人々により支配さる。牛馬の如く苦役せる吾人は何によつて慰藉なぐさされんか。

寧ろモーメントに生くるに若かんや

過去幾千歲興亡の跡に鑑み、將來幾百年の計を畫策するは偉大なる爲政家の事なり。着々として常道を踏み、出づるを計つて入るを制し、行末子孫の爲に慮るは良民の事なり。國家としては將に千世に八千代にさゞれ石の巖となるまで外人

に辱められず、國內の殷富にして衆人泰平を樂むを期し、個人としては慾を攝し嗜好に克つて、長生を期すべきならん。されど人間としては長生が常に望ましきか、國家としては永存が常に望しきか。

生命長ければ耻多しとは國家の上にも個人の上にもいふべからざるか。豚の如く食くひては眠り醒めては食ひ、古稀の年齒を重ぬるものあり。毫も世界文明に寄與する所なく、大なる文學も大なる哲學も目醒ましき行動もなくして、徒らに長き命脈を續くる國家あり。寧ろ櫻花と共に美はしく咲いて潔く散るに若かんや。

世に理智の結晶たる如き人、寄る年波に情念冷却したる人は學究如として青春の徒に説くに所謂穩健なる教訓、着實なる處世法を以てするあり。其の言や鑿々さくさくとして肯綮こうけいに觸れ誠に理の當然たる所ならんも或は小兒に説くに大人の道を以てするの弊なきか。小兒は小兒の心を有し青年は青年の心を有し老人は老人の心を有す。夏は暑し冬は寒し。嚴冬襦袍じゆほうを被りたるものが夏日浴衣を着るものを笑ふ權利あらんや。兒女が繪草紙を喜ぶを笑つて、これに名畫を愛玩せよと強うる愚者あらんや。然るに老道學先生が青年が功名に馳せ、戀愛に狂するを嘲つて、單調なる心たゆまるゝ、生を送らしめんとす、若し道德あらば、青年には青年の道德あり老人には老人の道德あり小兒には小兒の道德あるべき筈ならざるか。

左視右顧爲さんと欲して周圍を憚り躊躇巡逡決せざるは青年の青年たる所以にあらず。用意周到萬遺算なきを期して老人の道德なり處世法なり青年は宜しく其の青年の特色を發揮して是と信すれば直ちに決行して成敗を天に一任して顧みざるを快事となすべからずや。明日の事を思ひ煩ふ勿れ、一日の苦勞は一日にて足れり、昨日までは夢なり明日よりは定めなき天意、姮娥の人生確知すべきやうあらん。只今日は我れあるなり。この瞬間は我れあるなり。我れ在るの瞬間、及ぶ限りに於て我れの欲する所をなし、我が個性を發展す、煩瑣なる人生觀我れに於て何かあらん。

國人にふさはしからぬ煩悶

我文學の特徴は深刻ならぬ所にある。元來崇嚴雄大の趣は欠けてゐて、西洋文學を味つた人々には甚だ不足に感ぜらるるといふ。天外の寫實小説風葉の暗黒小説如何に人間の醜惡の方面を描いても、只言葉に思ひきつた所がある位で、性格に於て着想に於て左程寒心すべき程の非道敗倫のこともない。其程の大惡人をも罪業をも寫してゐない。ゾラ、イブセンなどの如く深く、人間といふものに愛想が盡きるほど其弱

點を剔抉してゐるのでもない。泣菫、晚翠の新體詩如何に莊嚴らしき題目文字を弄するともバイロン程の者の偉大なる辭句着想をも創造し得ない、芝居でも日本の惡人は可愛い所がある。

これが凡て日本人の特徴であるが、國の氣候風物山河、自然に住民をして崇嚴とか雄大とかの念を養はしめぬのである。それで食物こそこつてりした洋食を喜ぶものあるに至つたが、數千年間個有の性質趣味は變はるものでなければ、とてもミルトン、ダンテの作のやうな者が出やう筈がないし、又強ひてこれを以て責めるのは事理を解せざる人のことだ、日本人は宜しく優美閑雅洒然として溫和なる文學を作つて世界に傲ればよいではないか。女性的のしほらしい悲哀懷疑煩悶を寫せばよいではないか。國各々天賦の特徴あり、人各々天與の性癖を有してゐる。何も瘦我慢をして柄にないことを爲出かさなくてもよい。

姉崎博士曰く偉大なる煩悶をせよ。約百の如く、マンフレットの如く、ファウストの如く煩悶せよと。しかし日本人には約百を演じ得る役者はないのだ。宗教家などで随分精神的煩悶をした人もあらうが、此等の人も中途でけろりと小悟りに悟るものが多くて、十年一日の如く人生問題を夢裡にも忘れて研究してゐるものはない。西洋人の如くひつこく物に執着するのは日本人たる所以でないのだ。かの青年